

きたそらち

2020
8月号
No.233

～農業振興を通じて地域社会へ貢献～



6月下旬と7月初旬・中旬の3期にわたり、きたそらち種子馬鈴薯生産組合の組合員圃場にて防疫（病害虫）検査が行われた。

→記事の詳細は2ページ

農業振興を通じて
地域社会へ貢献

20th

JAきたそらち創立20周年
- SINCE 2000 -

目次

- 豊潤な甘みの赤肉メロン 北斗メロン初出荷 …… 3
- 青年部・女性部とJA常勤役員との懇談会を開催 …… 4
- JAきたそらち女性大学「カレッジ あみていえ」
第2講を開催 …… 4
- 稚内市で雨竜米のPR販売 …… 6

JAきたそらちでは、
ホームページとFacebookで、
魅力満載の情報を発信中です！
ぜひ、ご覧ください！

ホームページ



Facebookもチェック



JAきたそらち 種子馬鈴薯圃場の検査



販売部

6月22日と7月3日・15日の3期にわたり、きたそらち種子馬鈴薯生産組合（羽根清組合長、4戸）の組合員圃場における病害虫の検査を実施し、第1期から第3期で抽出された計31筆全てが検査に合格した。

同検査は、健全な種苗を国内の栽培農家へ供給するため、国が定める植物防疫法に基づき農林水産省植物防疫官や関係団体等が種子馬鈴薯のウイルス病等、10種類の病害虫の発生有無を確認する。例年、同検査の第2期と第3期は防疫検査となっているが、今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、第2期検査のみ防疫検査、第1期と第3期は空知総合振興局とホクレン職員が中心となり自主検査を行った。

7月3日の第2期検査では、多度志地区の同生産組合員圃場4戸を巡回し、農林水産省横浜植物防疫所札幌支所の防疫官1名による抽出検査が行われ、無作為に抽出された圃場計15筆全てが合格した。

農産課の担当職員は、「当産地では、馬鈴薯圃場周辺的环境整備や生産者、防疫補助員による抜き取り検査、適正な病害虫防除対策等の厳格な栽培管理を行っているため、例年に続き今年も抽出された全筆が合格している。今後の収穫期に向け、生産者とJAが一丸となり防除の徹底やウイルス罹病株の除去等の栽培管理を引き続き行っていく」と話す。



【農産課 辻】

道内市場との現地視察交流会を開催

青果部

6月23日、JAきたそらち青果・花き生産運営協議会（本瀬修二組合長）は、道内市場との現地視察交流会を開催した。例年であれば道外市場も招いて開催しているが、新型コロナウイルス感染症の情勢を踏まえ、今回は道内4市場を迎えての開催となった。

現地巡回では、野菜・果実・果樹生産者の計12圃場を訪問し、普段圃場や園地を見ることが少ない市場関係者は、生産者から生育状況や経営状況について説明を受けた。

昼食時は、深川市道の駅「ライスランドふかがわ」に立ち寄り、当JA農産物直売所「eciR」に隣接する『TEMARI』の9個詰め合わせおむすびをいただき、「見た目が美しく写真に写すととても映える」と市場関係者からは好評だった。

【青果課 植田】





豊潤な甘みの赤肉メロン 「北斗メロン」初出荷



6月25日、豊潤な甘みが特徴の赤肉メロン「北斗メロン」が初出荷された。この日は、北斗メロン生産協議会（伊井清隆会長、会員20戸）の橋本健さん（一已地区）が青果部野菜集出荷施設に計17ケース（1ケース4～5玉入り）を持ち込んだ。

今年は低温の影響により生育不良が若干見られたものの、この日の検査では糖度16度と甘さ十分のものが出荷され、昨年より6日遅いが平年並みの初出荷となった。

橋本さんは、「新型コロナウイルスの影響により流通の面では心配になる。外出等を自粛している方が多い中、各ご家庭でメロンを美味しく味わっていただき元気になってほしい」と笑顔で話す。

「北斗メロン」は、同協議会が約3haに作付けしており、7月中旬をピークに秋まで出荷が続く。今年は1万1千ケースの出荷、4千万円の売り上げを見込む。



青果部

甘みが特徴のスイートコーン 「サニーショコラ」初出荷

6月25日、甘みが特徴のスイートコーン「サニーショコラ」が初出荷された。きたそらちスイートコーン生産組合（高田浩組合長、14戸）の尾郷勝さん（納内地区）が、計4ケース（2Lサイズ3ケース、Lサイズ1ケース）を青果部野菜集出荷施設に運び入れた。

初出荷した尾郷さんの父・敏明さんは、「3月と4月は気温が上がらず、ハウスの温度管理に苦労したが、生育自体は順調に進んだため無事に出荷を迎えられた。今年も甘くて美味しいものができたので、多くの人に美味しく味わってもらいたい」と話す。

同生産組合では今年、約1.6haに作付けし、約1千3百ケースの出荷を見込む。出荷は札幌を中心に、7月下旬をピークに8月下旬まで続く。



青年部・女性部とJA常勤役員との 懇談会を開催



農業
振興部

7月17日、青年部・女性部とJA常勤役員との懇談会が営農センターにて開催され、両部の役員32名とJAから11名の役職員が出席した。

同懇談会は、第29回JA北海道大会で提起された“新たな協同組合の創造に向けた継続討議”の具体的な実践方策でもある「組合員との対話運動」の一つとして、今年1月に第1回を開催しており、第2回となる今回は「ポストコロナ社会における農業の役割」について意見交換を行った。

懇談会では、JA柏木孝文組合長が開会にあたり、「新型コロナウイルスが農業に及ぼす影響については、まだまだ計り知れないが、今回の懇談会で青年部・女性部役員の皆さま方から忌憚のないご意見をいただき、生産者とJAが手を取り合い“コロナ禍”と“ポストコロナ社会”における農業の実情をどのような形で消費者の方々に伝えていくか、また取り組んでいくかを考えていきたい」と挨拶した。その後、出席者が5班に分かれて「コロナ禍における『世の中の変化』で気づいたこと」や「アフターコロナでわかるもの」、「ポストコロナ社会における農業の役割は?」といったテーマでグループ討議を行った。各班では、「青年部・女性部の活動が制約されている中、消費者の期待に応えるためにやり方を変えてでも、食育活動や販促PRを継続させたい」、「これまで通りの生活は送れなくなっているが、生産者とJAが手を携え『食は腹を満たして身体を作る、腹は胸を満たして心を作る』というポリシーを持ちながら生産を続けていく」など活発な意見交換が行われた。グループ討議の後には各班での討議内容を発表し、生活スタイルや食シーンの変化、消費が大きく変容すると予想されるポストコロナ社会において、生産者とJAが手を携えて出来る事についてそれぞれ共有した。



JAきたそらち女性大学「カレッジあみていえ」 第2講を開催



農業
振興部

7月16日、JAきたそらち女性大学「カレッジあみていえ」の第2講が、深川市音江地区のアグリ工房まあぶとイルムの丘のりんご園 藤谷果樹園にて開催された。今回は、「農泊を学ぼう!」と題し、同市が昨年から取り組んでいる農泊事業について、実際に地元特産品を活かした加工体験や「観光農園」でのさくらんぼ狩り体験を通して学んだ。

アグリ工房まあぶで行われた加工体験では、全国に料理教室を展開する「ABC Cooking Studio」に同市特産品の食材を活かした新規メニュー 4品のレシピを開発いただき、この日はそば粉を使用したジャガイモとコーンの「ガレット」とリンゴの「ティラミス」の計2品を作った。またイルムの丘のりんご園 藤谷果樹園で行われたさくらんぼ狩り体験では、同園の田川大輔氏から栽培品目や販売しているジャム・ジュースなどの加工品について説明を受けた後、実際に園内に入り、自分のお腹を満たしたり、家族のために持ち帰り用を収穫したりと、旬のさくらんぼ狩りを楽しんだ。

今回より新たに14名の受講生が入学し、第1期生は30名となった。昼食を兼ねた懇親会では、岩田清正学長（JA代表理事専務）から新たに入学した受講生に学生証が授与され、改めて行われた自己紹介では、多くの受講生が「2年間、同期の皆さんと親睦を深め、楽しみながら学びたい」と意気込みを語った。

【営農企画課 佐藤】



「北育ち元気塾」 第3回研修会

6月24日、秩父別町と深川市にて「北育ち元気塾」の第3回研修会が開催され、塾生9名が出席した。秩父別町では、JA北いぶき本所にて融資経済課長の金子太郎氏による「経営・クミカンとは」と題した講義を受け、クミカンの成り立ちや制度について学んだ。

続いて深川市の農業センターへ移動し、空知農業改良普及センター北空知支所の酒井紀彰専門主任より「幼穂形成期の管理といもち病防除」について講習を受けた。また、北海道農業士の林祐輔氏宅（音江地区）では、複合経営の事例紹介「我が家の経営」について、将来を見据えた農業経営の方法等の講話を頂いた。



【営農企画課 石野】



新風



農家後継者



氏名 妙島 大翔 さん
 年齢 22歳
 就農年 平成31年4月
 地区 深川支所 メム地区
 経営主 妙島明さん

経営面積 19ha（水稲・大豆）

☆目指す農業

小さい頃から父の農作業を見て農業に興味を持ち、高校生の時には強く意識するようになりました。農業についての知識を得るために拓殖大学へ進学し、就農しました。

田植えの忙しいときや、気温が30度を超える暑い日などは、体もつらく大変ですが、農業のやりがいも感じます。また今後は、GPS自動操舵やドローンなどの最新技術を取り入れた農業に取り組んでみたいと思います。父や青年部の皆さんから学びながら、立派な生産者になりたいと思いますので、宜しく願っています。

【新規就農希望者受入農家・新規就農希望者募集】

JAきたそらちでは、新規就農希望者を受け入れていただける生産者を募集しております。興味がある方は、気軽に下記にお問い合わせ願います。

また、JAホームページ・新農業人フェア等で新規就農者の募集も実施しておりますので、お気軽にご相談願います。

- ◇ お問い合わせ先：農業振興部 営農企画課【TEL：0164-26-0134】
- ◇ ホームページ：http://www.ja-kitasorachi.com/farmer/index.html

ボランティア野菊の会

笹だんごを保育園と小学校に贈呈

深川支所

7月2日、ボランティア野菊の会（竹内接子会長）が笹だんご作りを行い、多度志保育園と多度志小学校に贈呈した。地元の食材（米や笹など）を使って作る笹だんごの味を伝えることを目的に平成12年より取り組んでおり、毎年桃の節句（3月初旬）に行っているが、今年は新型コロナウイルスの影響で延期となっていた。

今年は6名の会員が参加し、丹精込めて手作りしただんご62個を可愛らしくラッピングした。同保育園を訪問し、「みんなで食べてね」と手渡すと、受け取った園児は「ありがとうございます」と元気な声でお礼の言葉を述べた。また後日、同小学校の壽崎正人校長から、「新型コロナウイルス感染症拡大防止対策により、不安で不自由な学校生活を余儀なくされている現状ではありますが、美味しい笹団子に笑顔で喜び子どもたちの姿を見ることができ、職員一同大変感謝致しております（一部抜粋）」とお礼状をいただいた。

【深川支所 田中】



稚内市で「うりゅう米」のPR販売



雨竜支所

7月2日と3日の2日間、稚内市の相澤食料百貨店で開催された「あいざわ商店特別創業祭」に当JA雨竜支所が出店し、「うりゅう米」のPR販売を行った。

新型コロナウイルス感染防止の観点から、これまで他のイベント等で行ってきた「お米すくい」を変更し、今回は「うりゅう米パックご飯」が必ず当たるガラボン抽選会を実施した。今回は同支所営農課から職員3名が参加し、マスクと手袋を着用のうえ、こまめにアルコール消毒を行うなど感染防止対策に万全を尽くし、「うりゅう米」をPRした。当日15時まで予定していた本イベントは、お米の完売により13時で終了するなど大盛況だった。

同支所営農課職員は、「普段から「うりゅう米」を購入して頂いている方だけではなく、今回のイベントで興味をもって購入して下さった方もおり、PR販売の有効性を感じた。今後も「うりゅう米」のPRに励んでいきたい」と話す。

【雨竜支所 佐野】



女性部幌加内支部

ガーデニング(寄せ植え)講習会



7月2日、女性部幌加内支部(古屋光代支部長、部員53名)が「ガーデニング(寄せ植え)講習会」を開催し、部員21名が参加した。同支部では、毎年7月に日帰り研修を実施しているが、今年は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、幌加内町内でできる活動に変更して同講習会を開催した。

講習会では、旭川市の平間造園(株)より渡辺朋恵氏を講師に招き、花の寄せ植えを行った。部員は、用意された「一年草」や「宿根草」など10種類以上の植物の中からそれぞれ気に入ったものを4種類ずつほど選び、専用の土が入った鉢植えに植え替えていった。渡辺氏より「真っすぐ植えてもいいし、苗を斜めに植えてもいいですよ」といったアドバイスを



受けながら、1時間ほどで作品を完成させた。

この日は、あいにくの雨で肌寒く感じられたが、「可愛く出来た」「ちょっと地味かな～」などと感想を述べる部員もあり、和気あいあいと会話を楽しみながらの講習会となった。

【幌加内支所 岩本】



北竜支所年金友の会

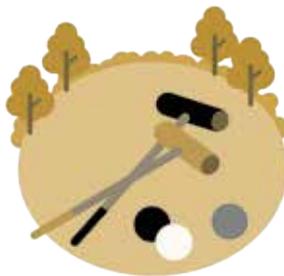
パークゴルフ大会

金融
共済部

7月9日、北竜支所年金友の会が「第19回 親睦パークゴルフ大会」を北竜ひまわりパークゴルフ場にて開催し、会員とJA職員をあわせて37名が参加した。当日は好天にも恵まれ、4コース36ホールを回り、参加者は一打ごとに一喜一憂しながら楽しくプレーした。

※成績は下記のとおり

【金融共済北竜支所 太田】



	男性	女性
優勝	四辻 進さん	大路 惠津子さん
準優勝	川島 武さん	長谷川美智子さん
ホールインワン賞	干場 正さん	

新型コロナウイルス感染症対策として JAグループが地域医療支援募金を実施

金融
共済部

昨年12月に中国武漢市で患者が初めて報告されて以降、全世界に感染が拡大し、我が国においても多数の感染者が発生した新型コロナウイルスについて、JAグループでは地域の医療を守るため、新型コロナウイルス感染者への診療対応を行っている厚生病院への支援や今後の更なる感染拡大に備えた感染防護具の確保など、医療従事者が安心して業務を行える環境づくりへの支援を目的に、支援募金活動を実施した。

当JAにおいても、7月8日から21日にかけて募金活動を実施し、各金融共済店舗カウンターには募金箱を設置し協力を呼び掛けた。期間中に寄せられた募金230,274円は、JA全中を通じJA全国厚生農業協同組合連合会（JA全厚連）の災害対策本部に贈呈された。

たくさんの温かいご支援に厚く御礼申し上げます。



「ホクレン・ディスタンスチャレンジ2020」深川大会

日本記録樹立で

当JA提供の深川産「ふっくりんこ」1年分贈呈



7月8日、深川市陸上競技場で開催された「ホクレン・ディスタンスチャレンジ2020」第2戦 深川大会の女子3000mにて、田中希実選手（豊田自動織機TC）が8分41秒35というタイムを出し18年ぶりの日本記録を樹立した。記録樹立を記念し、当JAが提供した深川産「ふっくりんこ」1年分が田中選手に贈呈された。

同大会には、国内外の中・長距離のトップランナー約300人が出場し、男女5000mや男女10000m、女子3000mなど全13レースが行われた。田中選手のほか、東京オリンピックのマラソン代表に内定している中村匠吾選手（富士通）や前田穂南選手（天満屋）、ホクレン陸上部からは河辺友依選手や清水美穂選手が出場し力走を見せた。また今回は、新型コロナウイルス感染症対策のため無観客での開催となり、競技の様子はインターネットを通して生中継された。

※写真提供：深川市役所





「自分塾(管理職編)」のスタートに当たって

相変わらずコロナ禍がくすぶる日々が続いています。爽りの秋に向けて、農業者の皆さんにとりましては、いよいよ収穫の時期となります。日夜たがわず、精根こめて育てた農産物が、例年通り滞ることなく循環することができるとを願ってやみません。とはいえ、これからは「ウィズコロナ」は必須。となると自然相手の農業者といえども、「新たな日常と向き合い、コロナとどううまく付き合い、逆にショックをバネにするハングリーさが求められてくるかもしれません。」

ところでそんな中、「自分塾をタイトルに、職員の体系的研修として去る6月17日、他の層に先立ち、管理職層のスタートが切られました。研修は時節柄、「3密を避けること」を念頭におきながらの窮屈なものにならざるを得ませんでした。私と受講者の方々、多くが初めての出会いになります。そこで冒頭、「JAきたそらち」に掲載されている拙文を介して自己紹介を行うことにしました。「皆さんの中で6月号をお読みになった方は？」と挙手をしてもらうと、発行されてから、既に半月あまりが経過しているにも関わらず、私の予想に反し手を挙げられた方は、残念ながら僅か2割ほどでした。寂しいこと、このうえない…それが私の偽らざる気持ちでしたが、せつかくの機会でもあり、貪欲にこれを生き

た教材に「と思い、早速、正直に私の気持ち吐露させて頂きました。「上司のあなたがそうなら、部下はもっと読んでいないと思っただ方がよいでしょうね。また、組合員の方々もどれだけ読まれているかは疑問です。私はこの広報誌はJAと組合員の皆さんとを結び貴重なツールと思っています。もしたら、忙しいかもしれませんが、せめて広報誌を「読し、お互いに内容を共有化するくらい」の気持ちを持たれてはいかがですか？」と。会った早々からなんと生意気な…そう思われた方もおられるでしょう。でも、それが研修講師として関わる私の一つの役割…そう割り切り、あえて発信をさせて頂いた次第です。これを聞く管理者の皆さんも大変でしょうが、こつした役割行動を求められる私も非常に勇気がいります。でも必要なら「反発が返ってくることを恐れずに覚悟を持つ」と、そのスタイルを貫いている毎日です。実はこの気持ちは管理職の方々にとつても、決して無縁ではありません。上司が部下を叱る場合を覚えて下さい。先般の貴JAにおける新入職員研修でも上司に代わり言わせて頂きました。「叱られるあなたも大変かと思えますが、叱る上司も大変なのです。叱られるのは期待の証と思って下さい」と。期待があるから叱るのです。もし叱られなくなつたとすれば「改善をされ叱る必要がなくなつた」か、あるいは「どうしようもない諦められた」かのどちらかです。叱ることは「関心がある

からこそなせる技…そのものです。そしてより重要なことは、叱つたその後に、多少でも前向きに変化を感じたとしたら「頑張っているね」などの労いの言葉を忘れないようにすることが肝要です。何故なら、それがないと「こんなに一生懸命やったのに」と不満の種となりかねないからです。

ところで最後にこの広報誌に関連してひと言。確か、これが発行されるまでには編集担当の方はもちろん、取材に協力をしてくださつた組合員の方々もいたりなど、多くの方々の苦勞の末に発刊された成果物です。となると、それが読まれているか否かは、それらの人にとつては「仕事の意味」や、モチベーション上でも極めて重要です。私達、JAは総合サービス産業といわれます。私はサービスとは「自分の欲することを他人に施しなさい」…それが根幹になければと思っています。しかも今回、受講された方々は部下を預けられ、将来のJAきたそらちを担うことを期待されている管理職の方々です。その人が、部下に、あるいは組合員の方々に、どのような背中を日頃からみせているかは「今後の行方を決める」といつても過言でないかもしれません。「モデリング」という言葉もあるように「学ぶことは「真似ごと」でもあるのですから。そつすると今流の言葉を借りれば、「互いにリスパクトされる人財に…それを目指したいものです。ね。より地域を発展させる為にも。

【著者】石田邦雄 (いしだくにお) 氏

1946年北海道新得町生まれ。(有)石田コンサルタントオフィス代表取締役、めでの研究室主宰。国鉄、会計事務所を経て中小企業診断士として独立開業。

現在は社会保険労務士、キャリアコンサルタントとして、組織改革や人材育成に携わる。人と企業のマッチングを目指し、中小企業大学校を初めJAカレッジなど、多くの団体、企業と携わる。「教えるよりも考える」、「学ぶより気づく」を柱に、体験学習を交えたわかりやすい研修が特徴。著書に「産業カウンセリング」や「縁を紡ぎ、人を育む」など多数。





【出席者】

- 小林 国之**
北海道大学大学院農学研究院准教授
- 柴田 倫宏**
JA北海道中央会専務理事
- 宮本 英靖**
JAピンネ代表理事組合長
- 佐藤 正昭**
JAこしみず代表理事組合長

出典：「北海道協同組合通信 2020 新春特集号」
「持続可能なJAの事業運営」北海道協同組合通信社

労働力確保や施設整備で支援

小林 農協の事業運営について、経営的な見通しはなかなか厳しいが、組合員と向き合い、結集力を高めることで事業を持続させていくという話があった。実際に農協で力を入れている取り組みを紹介いただきたい。

佐藤 大切なのは生産力をきちんと上げることだが、うちも農家戸数の減少に伴って1戸当たりの耕作面積が増えている。そうすると、手間がかかる野菜などが減り、だんだん畑作3品中心の経営に戻ってしまいます。これでは輪作の面でもよくない。一番の問題である労働力不足に対応するため、3年前に農作業支援事業を立ち上げた。今は外国人技能実習生と日本人合わせて15人おり、ニーズに応じて労働力の不足している農家などが活用している。

ふたつめは耕畜連携で、うちは畜産が販売高の2割ほどしかないが、条件が悪い農地を吸収してもらったり、安定的に堆肥を調達する上でも、畜産振興は地域にとって重要な課題だ。そこを重点的にやろうということと、酪農で数千ト規模の牛舎をつくる構想を立ててからもう5年もたつ。畑作地帯だからなかなか場所が

ない。そのため、今は離農する酪農家の牛舎を農協が借り上げ、そこからスタートしようと考えている。まずは生産力を維持することと、地域から人を減らさないこと。そのためどんな仕組みをつくるか。黙っているのは衰退の道しかないが、いろいろなことをやってみれば自然と人は集まってくるものだ。

また、畑作関係では新たな輪作体系の確立と併せて「畑作対策基金」の創設を検討している。

宮本 われわれのところは農地の8割が水田であり、中心となる米の生産性を高め、それをいかに集荷して有利販売していくかが農協の使命と考えている。1戸当たりの経営面積は平均16畝と、離農に伴ってこの10年間で2倍になっている。その中で米の施設については、行政の支援も受けながら新十津川町と浦臼町に1カ所ずつ、1万トの米ばら貯蔵施設があるが、3つめの1万トクラスを半乾ばら施設で整備したいという構想を持っている。現状の施設規模ではだんだん足りなくなってきたおり、次の策を打たなければ組合員の規模拡大に対応できない。遊休農地はなく、これからも1戸当たりの面積は増えていくだろう。農協の使命を果たす上でまずは施設が必要だと

考えている。

もうひとつは、国のスマート農業実証プロジェクトの個人経営型に新十津川町の個人の農園が採用され、無人化・省力化に向けた機械導入に取り組んでいる。すでにドローンや田植え機については、行政と連携して助成金対応の中で導入を進めており、こうしたスマート農業にも地域を挙げて取り組んでいきたい。これらハード・ソフトの両面から、地域の作付面積を維持し、生産力を高めていくことにより、それが総合事業の中で、金融や共済、経済事業にもつながっていくという考えだ。

また、地方の農協は、行政や地域の皆さんと一体の組織、社会のライフレイン的な組織と位置付けられている。そのため、町の政策と共同で事業展開をしたり、逆にわれわれの取り組みに行政に入っていたり、そこは相互に参画していかねばならないと思っている。今も要請があれば、農協事業とはまったく関係がなくても、組織体をつくって行政と一緒にやっているし、そうすることによって、財政面を含め、農協の事業に対して行政から支援をいただける部分もある。

生産性を上げるために

必要な経費

小林 農協としてやらなければいけないが増える一方で、経営の効率化も進めなければならぬ。これまで北海道の農協は、例えば生活店舗を外部化したり、人件費などの事業管理費を削減しながら、何とか経営の合理化を進めてきたと思うが、今後を考えると、事業の外出しもある程度終わり、人件費の削減も限界にきている。加えて国からは「働き方改革」が求められており、これからどう効率を上げていくのかというところも課題。実際問題としてこれ以上、人を減らすわけにはいかないだろう。

宮本 逆に増やさざるを得ないのが現状で、すでに米の調製施設などは、働き方改革に対応するため、2班から3班集体制に変更しており、青年部の皆さんに手伝わってもらって何とか人手を確保している状況だ。

加えて事業管理費も上がる。特に大きいのは管理部門のチェック機能で、すべてにおいてダブルチェックが必要、ひとりで対応してはいけなく、行動するときも2〜3人で動くようにとの監査指導が入っており、これによる人件費の上昇が大きい。

佐藤 事業管理費は間違いなく上がる。下がることはないだろう。特に、

農作業支援事業などをやると農協全体で抱えるコストは上がっていく。加えて一番困っていることは、地方にはなかなか良い人材が集まりにくくなっていること。大学と連携してインターンシップをやりながら人材確保に取り組んでいるが、そこが難しくなってきた。女性職員もかつては8割が準職員だったが、もう正職員でなければ定着は望めない。社会環境の変化に合わせて、資格試験なども活用しながら、段階的に正職員にしていかなければためだろう。

宮本 うちも準職で採用しても、初級の資格を取れば3年後には正職員の道を約束している。皆さん試験に真剣に取り組んでくれており、正職員になった後は管理部門以外も経験させるよう人事も合わせて対応している。

小林 事業管理費の上昇は避けられない状況だが、こしみずの農作業支援事業などはまさに農家をサポートする素晴らしい取り組みだ。今後、部門としての収益性についてはどう考えているのか。

佐藤 そこが問題だ。派遣先の農家個々からはそれぞれいただが、支援事業はこれから先、農協の基幹

的な事業になると思う。そこは将来的に営農指導の対価をどうするのかということを含めて、考えていく必要がある。同時に、町の基幹産業を育てるためには行政の支援もいたしたい。酪農の法人化の話も、町と農協が出資する形で、しっかり経営管理しながら進めていきたいと考えている。そこで掛かるコストについても内部でしっかり議論していかなければならない。生産性を上げるために必要な経費だということを、組合員の皆さんと共有しなければできない話ではない。今こそ協同組合として、組合員にも意識変革を求めていかなければためだろう。

小林 農協の仕事は農産物の販売など目に見える事業だけでなく、地域に関わるさまざまなことがある。それが経費でいうと事業管理費として出てくるわけだが、今後はどこかの段階で、手数料や賦課金のあり方を含め、農協の営農指導事業とは何かという話を整理して、個々の農協でどこまでやるのか、それをやるためにはどれだけコストがかかるのか、ひとつひとつ議論していくことも必要になってくるだろう。

宮本 実は、うちは2008年まで営農賦課金をもらっていなかった。旧新十津川農協は賦課金がなかった

ので、98年の3農協合併の折に、合併しても賦課金はもらわず、そのため営農指導にかかる資金は総合事業の中でやりくりしていたが、営農渉外課を設けたのをきっかけに賦課金をもらうことにした。水準は空知管内の平均で組合員1人当たり1万円、水田は10ア当たり200円で、6万円が上限。これについては組合員から大きな反対もなく理解いただくことができた。

佐藤 うちも賦課金はもらっているが、施設を建てる時に出資金はもらわずにやってきた。農協経営の中でしっかり内部留保し、自分たちの努力でやるという方針だったから。ただし、これからはそうは言っていない時期がくると思う。これから考えられるのは、手数料そのものを上げるのは無理だと思うが、コストとして掛かるものはいただくという形だろう。

一方、もらうばかりではなく、うちは事業分量配当で毎年約1億円を組合員に戻している。300戸強だから1戸平均30万円ほどだが、それを経営主の退職金として積んでいる。10年たてば300万円、20年たてば600万円になる。農家には退職金制度がないので、農家の経営管理のひとつとして、そういう仕組みも考

えておかなければならない。税金対策も同じで、相続や贈与税など総合的な税対策となるとあまり準備していない人も多く、農協がサポートしていかなければ。農家の経営を守るためにはそういった仕組みも必要だし、農協の経営にとっても重要になってくる。

柴田 今回の事業基盤に関する検討に関しては、農水省も全国の農協に対し、営農指導を含めた経済事業を黒字化するよう指導しているが、最近では赤字だからすべてだめだといつではなく、農協が総合事業をやっている中で、全体としてコントロールできているのであれば問題ないのではないかと、という言い方に変わってきている。経済事業は黒字にしてほしいという本来の思いはありつつも、例えば都市型農協などであれば、黒字までいかななくても賦課金をもらうことで「きちんとコントロールできている」と言えるのなら、外からいろいろ言う必要はないのではないかと。当然、コントロールできていないところに対しては厳しい対応になるが、農水省内でも少し流れが変わってきたように感じる。われわれとしてもそれに沿って取り組んでいきたい。

その中で金融事業をめぐる環境が

厳しいというのは共通した課題であり、この先も持続可能な経営基盤を確立する上で、それぞれの農協が自分たちの強みや弱みを考えて取り組んでいくということだと思う。奨励金など環境の変化に応じて各農協で毎年シミュレーションを繰り返しながら、中央会もそれを共有し、収支の改善見通しや安定的な収支を確保するためにどうあるべきかなど、その農協に合わせたお手伝いをしてきたいと考えている。

ただし、この間、農協改革などを通じてさまざまなことがあったが、農協に対する社会の意識も変わりつつあるのではないかと。江藤農水大臣の就任あいさつでも、これだけ全国で災害が毎年ある中で、地域のJAのあり方については、本来の経済事業だけでなく、地域への貢献などをきちんと評価しなければだめだと発言していたし、併せて家族経営の位置づけをどうするのかという問題提起もしていた。時の大臣がああいう発言をしたのは重要なこと。潮目が変わってきたのではないかと感じている。

佐藤 農水省も農協改革の中で農協に対していろいろと厳しいことをやってきましたが、中身をよく調べてみると、逆に協同組合が地域でどうい

うことをやっていたのか、見えてきたのではないかと。私自身、自分たちが進んでいる道は間違っていない、正しかったんだと改めて感じている。

小林 これからは「正しかった」ということをもっと声に出し、内外にわかりやすく伝えていくことが重要だろう。全国の農協でも組合員との対話として職員訪問などを実施しているところがあるが、ピンネの営農渉外課やこしみずの農作業支援事業などの取り組みは全国でも驚かれる事例だと思う。中央会と連携し、北海道からもぜひいろいろな形で発信していただきたい。小清水では農作業支援事業に人を呼ぶためラジオ番組などの媒体もどんどん活用して発信している。

佐藤 やるほうは大変だが、ラジオを聞いて実際に人が来てくれれば達成感があり、また頑張ろうとなる。その積み重ねが大事だと思う。

農作業支援事業に関しても、町内で廃校になった高校の跡地を活用して拠点施設をつくろうと今動いているが、その構想を上げてきたのは職員。かなり大きな施設だし、ランニングコストもかかる。これは大変だと思ったが、一緒になってやってくと形ができてくる。やらなければ何も生まれないが、やることによって

て何かが生まれる。衰退よりは何かすること。それを職員が自分たちで考えて提案してきたところに心を打たれた。総代会で反対されればできないが、農協はそういった組織であり、組合員が受け止めることも大事だと思う。

柴田 職員の思いがそのような形で積み上がってくると、今度は理事者も組合員の皆さんに理解してもらおうと頑張る。そうしたひとつひとつの積み上げが、協同組合運動の原点という気がする。

事業間連携など 結び付き柔軟に

小林 持続可能なJAのあり方というところで私が感じているのは、今は北海道に108JAがあり、これから少し合併が進む可能性はあると思うが、例えば事業間連携など、JA同士がもっと有機的に結びつくことによって、コスト面では事業管理費を削減したり、販売面ではより機敏な対応を可能にするといったことも求められていくのではないかと。

佐藤 オホーツク管内は14農協あり、うちを含めて合併はそれほど進んでいないが、これからは管内14農協が連携し、共通の課題を持ち寄りながら、将来ビジョンをつくっていく

くことが大事だと思う。その中で事業間連携に関して言えば、うちにはオホーツク農協連がある。小さな農協は人材確保が大変なので、各農協ではできないような事業の中身を精査し、それに対応できる人材をオホーツク農協連に集め、いつでも相談できるような組織にしていきたいと考えている。全道的な課題には中央会が対応してくれるが、管内特有の悩みというのもある。農協の駆け込み寺ではないが、オホーツク農協連を核にして、単体の農協事業のことだけでなく、組織全体で地域を守り、共有のオホーツクブランドを大切に育てていくという、もっと広いところに目を向けていかなければだめだと思う。また、そうした相互的な取り組みを進めることによって、それを見ている組合員にも、協同組合やJAグループの大切さが自然と伝わっていくのではないかと考えている。

宮本 うちも事業連携に向けた新たな取り組みとして、中空知地域のJAたきかわ、JA新すながわ、ピンの3農協の間で選果施設の共同利用を検討してきた。青果物などの選果施設は各農協で持っているが、水田の規模拡大に伴い、どこの農協も野菜の生産規模が小さくなってき

ている。そのため3農協で事業連携を組み、共通する品目の選果施設を共有化できないかということや5年前に提案し、最初に花きの集荷・選果施設で実現することができた。JA新すながわの花をうちの施設で選別し、産地もしっかり明記しながら出荷している。また、たまねぎはJA新すながわが広域の事業連携で中心的な役割を担っており、この部分でも何とか中空知3農協で事業連携が組めないかという提案をしている。このほか、アスパラ、いんげんなども、それぞれの農協で小規模な施設を持っているが、地域で連携が取れないかと提案している。時間はかかるかもしれないが、規模が縮小して施設を維持できなくなる前に、何とか2つ、3つの事業連携を形にしていきたいと思っている。組合員のためにも、ぜひ進めていきたい。

佐藤 施設をまとめるのは大変だ。オホーツクでもビーンズファクトリーをつくったが、あれは実現するまでに5年ぐらいかかった。管内のどん粉工場の再編も同じで、ようやくひとつ区切りがつくが、これは10年かかった。一度まとまれば行政などの支援も得られるが、やはりわが町、わが農協という思いがあるから時間がかかる。しかし、いよいよひ

どくなってからでは遅い。先の話をしていかなければ。

柴田 厳しくならないとまとまっていけないというのはまったくそのとおりで、ピンチをチャンスとして捉えないと、事業間連携などの話が出てこないと思う。例えば農協合併についても、今までのようにどんどん進めればいいとは思わないし、皆さんが考えた結果が単独での総合事業体だとすれば、その体制を維持していくためにできることは何か、各農協や地域で考える土壌が出来つつあるというのは、ある意味チャンスだと感じる。その中には、いろいろな事業間連携もあれば、施設の効率利用もある。それをどの範囲でやるのか。地域や事業内容によって、オホーツクのような地区単位でやることもあれば、中空知のような農協単位でやるものもある。そういう皆さんの協議の場に、われわれ中央会やホクレン、信連など連合会が入りながら、JAグループの役割を北海道全体で考え直し、トータルコストを圧縮していけるよう、中央会としてもできる限りのことをしていきたい。

また、全国的に持続可能な事業運営のあり方ということが出てきているのは、金融店舗やATMの集約化

などを通じて浮いた人員を対話型の業務に回すというのが大きな柱になっている。そう考えると、ピンの宮農涉外課などはまさにそれだし、こしみずの農作業支援事業を含め、全国の動きを先取りした取り組みが道内で動いていると言える。北海道からもこうした事例を積み上げ、全国に発信していく必要があるだろう。

小林 これまで組織基盤の強化については、最初に合併目標を掲げ、そこに向かって北海道もやってきたが、今は各JAの考え方を最優先し、単独でいくのであれば支援していきましようというスタンスに変わっている。そこをこれからも大事にしながら、農協のあり方をもう少し広い視野から柔軟に考えていければ、JAというのは十分に持続可能な存在であり、再評価されてきている部分もある。これまでやってきたことに自信を持って取り組みつつ、まずは組合員や地域の人たちに理解してもらいながら、外にも発信していただきたい。今日はありがとうございました。

(おわり)

補聴器の歴史

医療社団法人本間クリニック 院長 本間 裕



耳の病気で難聴になり、現在治療法のない方、あるいは高齢になり聞こえが遠くなってきた方にとっては欠かせない補聴器ですが、時代とともに発展してきました。ドイツでラッパ型の補聴器が作られたのが1700年代でした。作曲家のベートーヴェンが難聴になり、愛用していたと言われています。



19世紀になり、マイクロホン（マイクのこと）が開発されました。それを用いてアメリカのグラハム・ベルが「電話機」を発明し、その2年後にドイツのジーメンスが「難聴者向けの電話受話器」を開発しました。これが電気装置を使った補聴器の始まりです。

1920年代には真空管を使った補聴器が作られました。お弁当箱のような大きさで、持ち運びはほぼ不可能でした。戦後トランジスタが開発され、小型で耐久性のあるポケット型補聴器が普及し始めます。「お弁当箱」から比べると小さくなったものの、箱型であることは同じでした。



1960年代にはICチップを使った補聴器が登場します。IC（集積回路）とはトランジスタを数多く持ち超小型化した半導体のことです。基板の小型化が進み、現在主流である耳かけ型や耳あな型補聴器が誕生しました。

そもそも音とは空気の振動で、それをマイクで電気信号に変換します。これはアナログ信号ですが、電子工学が進歩して、アナログ信号をデジタル信号に変換してデジタルで制御を行う技術（AD変換）が生まれました。この技術を用いて作られたのがデジタル補聴器です。アナログ時代はネジを回して音の増幅や若干の音質加工をしていたものが、デジタル補聴器ではコンピュータで直接

調整が出来るようになり、耳に優しい「ノンリニア」、ハウリング抑制機能などにより耳に優しくなりました。

2000年代となり、コンピュータ自体が格段の進歩を遂げ、補聴器もそれにつれて大幅に高機能化しました。調整の細かさを示すチャンネル数も2チャンネルから32あるいは64チャンネルとなり、超小型の耳掛け型補聴器、オープンフィットタイプや、耳掛け型ではあるがスピーカーが耳の中にある外付けレシーバータイプが主流となり、スマートフォンを使ったりリモートコントロール機能や、学習機能など多くの付加的機能が今も開発され続けています。

このように補聴器は時代とともに進化してきましたが、使いこなすのは人間です。残っている聴力の正しい評価なしには補聴器を使いこなすことはできません。日本耳鼻咽喉科学会では「補聴器相談医」、日本補聴器技能者協会では「認定補聴器技能者」の資格をそれぞれ認定しています。聞こえが遠くて補聴器を使ってみたいとお考えの方は、まず一度耳鼻咽喉科で相談されることをお勧めいたします。

補聴器の内部構造（耳かけ型の例）





JAグループ北海道では、4月中旬より中止しておりました「国産花き販売会」を、6月5日より感染防止対策に十分配慮した上で、札幌市北農ビル(札幌市中央区北4条西1丁目1番地)で再開いたしました。

新型コロナウイルスの感染拡大により、イベントや式典の中止が相次いでおり、国内の花き需要は大幅に減少しています。そこで、JAグループ北海道では「花を贈って応援! みんなのよい花プロジェクト」と題して、「国産花き販売会」の実施により、国内の花き農家を応援しております。販売会は7月末までの毎週金曜日の開催を予定しております。

JAグループ職員のみならず、花が好きの方や花き農家を応援して下さる方、JAグループ北海道を応援して下さる方など、たくさんのお客様にお越しいただいております。引き続き、是非ご自宅にお花を飾り、花き農家を応援しています。



JA北海道信連

令和元年度に、JAバンクの食農教育活動として、「親子で学ぼう! あぐりキッチン教室」を全道JAの協力を受け、開催しました。その開催目的は、子どもの農業に対する理解を深め、北海道農業やJA・JAバンクのサポーター層を拡大することにあります。

先ごろ、農協観光の優績JA表彰において、当活動が地域の交流・活性化に寄与したと認められ、地域交流部門の優秀賞を受賞しました。



© よりぞう



ホクレン

ホクレンは、北海道日本ハムファイターズと共同で展開している「北海道農業応援プロジェクト」の一環として、同球団選手と道内生産者が交互にメッセージを送り合う「キャッチボールトーク」動画を制作、同プロジェクトの特設サイトに公開しました。登場しているのは、JA道青協の村田辰徳会長、JA道女性協の青山伸子会長ら生産者と、ファイターズの中島卓也、近藤健介両選手らそれぞれ5人ずつで、新型コロナウイルス対策や農作業、トレーニング内容などについて交互に語り、エールを交換しました。



JAグループ北海道の連合会・中央会の活動内容を紹介します。各団体の詳しい取り組み内容はWEBサイトをご覧ください。



JA共済連北海道

令和2年度に道内各市町村の消防本部へ寄贈する救急自動車が決定いたしました。救急自動車の寄贈は、地域社会貢献活動の一環として、昭和50年から毎年取り組んでおり、昨年度までに、延べ206台の救急自動車を道内各地の消防本部へ寄贈しております。

今年度は、上川北部消防事務組合消防本部中川消防支署(中川町)、網走地区消防組合消防本部大空消防署(大空町)、大雪消防組合消防本部美瑛消防署(美瑛町)の3か所となります。今後も行政とJAとの連携を図りながら、交通事故の防止と被害者救済への取り組みを強化してまいります。



JA北海道厚生連

新型コロナウイルスの影響で一時的に中止しておりましたが、すべての病院・クリニックにて再開しました。

一部でご利用いただけないオプション検査もございますが、感染対策の徹底を図っておりますので、安心して受診くださいますようお願いいたします。



ホームページはこちらです。ご覧ください。



がんばれ!日本の農業

よりぞう、大地と地域のみらい、JAグループ <https://otg.ja-group.jp/>



クロスワードクイズ

提供元:クロスワード.jp

1	2		3	4	5
			6	7	
8		9		10	11
		12		13	14
15	16		17	18	
			19		20
21		22		23	24
			25		

A	B	C	D
---	---	---	---

【タテのカギ】

- 2 魚肉をすり鉢などですりおろしたもの
- 3 木をたたき切ったり、割ったりする道具
- 5 「佐藤錦」や「紅秀峰」などの品種がある果実
- 6 動物園にいる首が長いほ乳類
- 7 地球上の陸地以外の部分、地表の約7割を占める
- 8 白菜などの野菜と唐辛子などの香辛料を使う朝鮮の代表的な漬物
- 9 太陽から6番目に位置し、周りに輪っかをもつ惑星
- 11 動物が口や鼻から空気を吸ったり吐いたりすること、呼吸
- 13 人や車両などが通行するための道
- 16 手のひらのシワや肉付きなどをもとに運勢の良否を判断する占い
- 18 唐辛子の甘味種、実の先が獅子の口に似ていることが名前の由来
- 19 目は○○ほどに物を言う
- 20 山よりも低い小高くなった土地
- 21 手足の末端の枝のように分かれた部分
- 22 川の流れをせき止め、水を貯めるための大規模な堤防
- 24 病気やけがを手術などによって治療する医学分野

【ヨコのカギ】

- 1 病気やケガを治すために、飲んだり塗ったりするもの
- 4 魚を釣るために釣り針につけるもの
- 6 一昨日←○○○←今日→明日→明後日
- 8 黄色と緑の間の色
- 10 木乃伊
- 12 野菜・魚・肉などの新鮮さの度合
- 14 1位：○○メダル>2位：銀メダル>3位：銅メダル
- 15 地面の底、地中深いところを意味する語
- 17 2021年の干支
- 19 日本列島に沿って太平洋を流れる暖流、日本海流
- 21 夏の夕方に降る激しいにわか雨、雷を伴うことが多い
- 23 尾が長くちぎれやすい爬虫類、
- 25 四足は短い動きがすばやしい動物園にいる鼻が長いほ乳類

6月号の正解は

「ミナヅキ」でした。

正解者の中から抽選で3名が選ばれました。

深川市 太田 輝己 様
 深川市 毛利 優花 様
 滝川市 中村 羽那 様

応募方法

正解者の中から抽選で3名様に農協全国商品券をプレゼント。ホームページ応募フォーム・ハガキ・FAXで①クイズの答え②住所、氏名、年齢③身近な出来事④農協だよりに対するご意見ご要望を記入の上ご応募下さい。

締切8月31日消印有効で当選者とクイズの答えは10月号に掲載します。

【送り先】〒074-0022 深川市北光町1丁目10番10号

JAきたそらち総合企画室企画広報課 FAXの場合は 0164-22-8611

【ホームページ応募フォーム】URL: http://www.ja-kitasorachi.com/application_form/

※ご本人以外による応募は抽選の対象外とさせていただきます。

七月俳句

● 雨竜俳句会

廃校に松明のごと大でまり
 虫を引く蟻一匹の力こぶ
 みどり兎の双手広げる豆二葉
 街の灯も覆い隠して五月闇
 田植え後に待つて嬉しき而となる
 ゆつくりと新茶を含み雨の朝
 若人のシャツの背中に染みる汗

有田 茉莉
 大林アヤ子
 北川 満江
 小山 邦男
 松木 五月
 宮武めぐみ
 吉見サヨ子

● 「道」俳句会 北電支部

夏淡し雲のかけはし旅立つ師
 新じゃがの味は贅沢峡暮らし
 今日すべきことの多々あり夏至の雨
 紫陽花や雨に慕情がこぼれだす
 ジャガの花しかと確かむ鬼彦碑
 半夏生遺影の夫は聞き上手
 草取りの夫の一途さみせし庭
 たんぽぽの綿毛が休む孫の帽

山本 玲子
 阿部れい子
 吉尾 広子
 山岸 正俊
 山下 好晴
 佐光久美子
 高田 紀子
 中島 雅子

● 土筆俳句会

老斑や我が歳月の夏の果て
 着物解き寸胴に縫ふあっぱっぱ
 ぼうたんの花冠支える杖あまた
 鎮魂の草むら猛る古空き家
 回らない鮎の旨さは子のおごり
 針槐うずきとなりて散り敷ける
 落暉燃ゆ夏至の田色を恋う老母

高尾美津子
 池田 美知
 坂本 朱実
 山川 輝子
 南川富美子
 佐藤英三子
 小橋 厚子

第7回理事会 〈令和2年7月2日開催〉 以下の事項について決議・承認されました

- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 関係団体等諸会議について 2. 組合員の加入脱退について 3. 財務報告及び事業実績について 4. 固定資産の取得ほかについて 5. 反社会的勢力排除対応状況及びマネー・ロンダリング対応状況について 6. 令和2年度 上半期決算実地棚卸 理事並びに監事立会計画について 7. 職員の人事及び業務事故について 8. 貸出実行報告について 9. 令和2年度 主要農産物の生育概況（6月15日現在）について 10. 令和2年度 JA検査員配置体制と米集荷繁忙期人員体制について 11. 令和2年産米 作付面積・出荷契約・特定米穀予約申込状況について | <ol style="list-style-type: none"> 12. 令和2年産 畑作物作付状況について 13. 令和2年産 小麦取扱いについて 14. 令和2年産 玄そば出荷契約数量について 15. 畜産物の販売状況について 16. 青果・花き販売実績について 17. 令和2肥料年度 肥料価格の設定について 18. 令和2年 温材予約奨励金の支払いについて 19. 令和3年度 春肥料及び温材予約推進の実施について 20. 経済部事業実績について 21. 経営継続補助金の概要について |
|--|--|

議案第1号 組合員の出資金持分譲渡について
 議案第2号 貸出金の貸付について

議案第3号 幌加内支所そば乾燥調製施設色彩選別機入替工事について



組合員の動き

(令和2年6月末日)

		当期首	加入	脱退	当月末
正組合員	個人	1,389	10	47	1,352
	団体	86	2	0	88
准組合員	個人	6,040	59	189	5,910
	団体	331	1	17	315
正組合員戸数		988	1	21	968



JAきたそらち太陽光発電所 発電実績

○令和2年6月実績

○累計（R1.12～R2.6）

発電電力 **47,332kWh**

発電電力 **307,103kWh**

計画対比 Δ 3,650kWh

計画対比 + 71,024kWh

前年対比 Δ 12,966kWh

前年対比 Δ 10,505kWh

金融共済部 融資課からのお知らせ

住宅の新築・増改築、中古住宅の購入、土地の購入、他金融機関からの借換に!

キャンペーン期間
令和2年9月30日水まで

JA 住宅ローン

キャンペーン
対象条件

・正組合員および准組合員の方
または
新たに准組合員になれる方

①～⑤をご利用中または新たにご利用いただける方
①給与振込 ②公共料金の口座振替 ③JAカード
④JAネットバンク ⑤JAローンをご利用中の方

(借入対象者)
①(借入対象) 200万円以上、勤続年数3年以上 (必要書類)
②(借入対象) 10万円以上500万円以内 運転免許証等、健康保険証等、源泉徴収簿等、住民票・
(借入期間) 3年以上25年以内 運転免許証等、健康保険証等、源泉徴収簿等、住民票・
工事請負契約書等、その他JAが必要とする書類

固定変動選択型

上記、キャンペーン対象条件①～④のうち、
1項目のご利用で

2項目のご利用で

3年 固定	0.70%	▶	0.60%
<small>【現在の店頭貸出利率：年1.65%】</small>			
5年 固定	1.15%	▶	1.05%
<small>【現在の店頭貸出利率：年2.25%】</small>			
10年 固定	1.25%	▶	1.15%
<small>【現在の店頭貸出利率：年2.85%】</small>			

9大疾病補償保険の保険料を当JAが負担!

※通常、3大疾病特約を付ける場合は0.1%上乗せ、
9大疾病特約を付ける場合は0.2%上乗せになります。

固定期間終了後もその時点の店頭金利より引き下げ!

固定変動選択型 を再選択で ▲0.50%

変動金利型 を再選択で ▲1.20%

全期間固定金利型

上記、キャンペーン対象条件①～④
のうち、1項目のご利用で

2.15%

【現在の店頭貸出利率：年2.60%】

いずれの金利にも別途、保証料がかかります。
(一括払い・分割払いのいずれかよりお選びいただけます。)

さらに!

JAで定める省エネ住宅対象基準に適合する場合

お借入日より 貸出
3年間 利率から年0.30%引き下げ!

太陽光発電システムや物置、住宅の補修費用に!

JA リフォームローン

キャンペーン利率

現在の店頭貸出利率
年2.85% ▶ 2.15%

●保証料込(北海道農業信用基金協会保証) ●変動金利

キャンペーン
対象条件

・正組合員および准組合員の方
または
新たに准組合員になれる方

①～⑤をご利用中または新たにご利用いただける方

①給与振込 ②公共料金の口座振替 ③JAカード
④JAネットバンク ⑤JAローンをご利用中の方

(借入対象者)
地域に種ざし継続して安定した勤務先からの収入がある方
(借入金額) 10万円以上500万円以内
(借入期間) 1年以上15年以内
(必要書類)

運転免許証等、健康保険証等、源泉徴収簿等、見積書・
工事請負契約書等、その他JAが必要とする書類

さらに!

JAで定める省エネ住宅対象基準に適合する場合

お借入日より 貸出
3年間 利率から年0.30%引き下げ!

詳しくは、お気軽にお問い合わせください!

・金融情勢等の変化により金利を見直しさせていただく場合がございます。
・ご返済方法等、ご融資の詳細については、窓口へお問い合わせ下さい。
・審査の結果、ご希望に沿えない場合もございますのであらかじめご了承下さい。

JAきたそらち

本 所 TEL 0164-22-6618 多度志支所 TEL 0164-27-2111
音江支所 TEL 0164-25-1111 雨竜支所 TEL 0125-77-2331
深川支所 TEL 0164-22-2171 北竜支所 TEL 0164-34-2280
納内支所 TEL 0164-24-2211 幌加内支所 TEL 0165-35-2024